

第2回山形県環境教育推進協議会 会議録

1 日時 平成24年11月29日(木) 午後1時30分～午後3時35分

2 場所 山形県建設会館大会議室

3 出席者等(敬称略)

(1) 出席委員

今村 哲史	大泉 徹	白壁 洋子	二藤部 真澄	板垣 巖
安積 力也	岩沢 ちか	松田 一彦	大澤 賢史	阿部 利春

(2) 欠席委員

大熊 幸子	佐藤 真人
-------	-------

(3) 県関係課

教育庁生涯学習振興課課長補佐(生涯学習担当)	伊藤 吉樹
〃 高校教育課指導主事	高橋 俊彦
環境エネルギー部水大気環境課課長補佐(大気環境担当)	佐藤 至
〃 循環型社会推進課課長	中川 芳則
〃 みどり自然課みどり環境主査	志田 史代

(4) 事務局

環境エネルギー部環境企画課課長	高橋 康則
〃 環境政策主査	斎藤 満宏
〃 主査	樋口 俊一
〃 主事	木方 道子

4 会議の概要

(1) 開会

(2) 挨拶

環境エネルギー部次長から協議会開会にあたり、挨拶がなされた。

(3) 協議

① 山形県環境教育等行動計画（仮称）における環境教育の基本的な考え方の骨子（案）について

環境企画課長から、資料1、2により説明がなされた後、各委員が意見交換した。意見交換の内容は以下のとおり。

<各委員の意見>

今村会長	事務局から説明のあった部分について、山形ならではの考え方という観点を含め、意見を伺いたい。感想でも差し支えない。
安積委員	<p>学校教育の現場に立つ者としての感想と意見を述べる。県外から5年前に転居してきた者として感じる「山形県らしさ」は、山形県には教育の本質的なものを大事にしようとする雰囲気はまだ生きていると思う点である。これはある意味、地味な在り方だが、歴史的に見ても、無着成恭など全国の公教育に深い影響を与えた教育実践が生み出されており、そういう教育的風土があるのだと思う。私は私学の教師だが、最近、県内の公立学校の先生方や教育関係者に講演をさせていただく機会が増えており、そこでの交わりや応答内容を通して、東京で感じるものとはずいぶん違うな、という印象を強くしている。</p> <p>今回の資料を見てまず気になる事は、「環境教育」の定義づけが不明である点だ。これまでの環境教育は「環境保全のための」教育という視点でなされてきているように思われるが、学会レベルでは、「環境そのものを教材として活かす教育」というところに環境教育の本質を見ろという、新たな動きがある。</p> <p>前回も話題になったが、そもそも人間にとって「環境」とは何なのか。そこには自然環境や物的環境のみならず、人的環境も含まれる。つまり環境とは、人間が生活し生きる舞台そのものである。学校教育においては、「学校」という舞台、環境があって、その中で生きることを通して、子ども達を発達成長させようとする。今回改めて国や県の基本方針を読んで、この環境教育が目指すものは、基本的には「人づくり」であることが分かった。ということは、環境教育の一番中心となるべきテーマは、「人間を人間たらしめる環境」とは何なのか、そのような環境をどう創り出すか、という点にあると私は考える。今</p>

の学校教育がそのような環境を創り出せているかと考えると、否としか言いようがない。その意味でこの環境教育の推進は、教育の本来的な在り方を推進するために大変重要で喫緊の教育課題だと思う。

以上の基本的視点から、具体的意見を数点、申し上げたい。

まず、資料2の4ページ、「(2) 環境教育に求められるもの ○求められる要素」について。ここに列挙されている要素はそれぞれに深い意味があると思うが、一番大切なものが欠けていると思えて仕方がない。先ほど私が申しあげた意味での「環境教育の本質」が推進されるためには、いったい何が育たなければならないのか、それは「自発性」だと思う。これこそが「サステイナブル(sustainable)・持続可能」な社会を実現させるための必須の「人づくり」の要件だ。であるならば、環境教育推進を担う私達には、いかにして「自発性が育つような環境」を生み出すか、が問われると思う。

私も学校教師なのでよく分かるが、教師はどうしてもすぐに、「学力」とか「教科」を考えて、教科教育の枠の中で新しい「教材」をどう作るか等と、非常に狭く考えてしまう。それでは「人間」を育てる環境は作れないと私は思う。環境教育の視点のすごさは、「教師」も「環境を作る要素」の一つ、「学校教育」そのものすらも、子どもを取り巻く大きな「環境」要素の一つと位置づけている点にある。子どもを取り巻く人的、物的、自然的な多様な諸環境を、いかにして有機的に整え直すか。子ども自身がその中で自由に生き生きと生きられて、しかも最終的には、環境教育が求めるような「みずから、自然を愛し、人間を愛し、自分が住む地域を心から愛する、責任ある主体」が形成されるような環境。ここには、そんな環境を我々大人がそれぞれの立場の総力を挙げて創り出そうとする、優れた視点がある。私の学校（基督教独立学園高校）は、課題を多く抱えながらだが、まさにそういう環境を24時間生活を共にしながら創り出そうとしてきた教育共同体であり、皆さんが必要とするならば、喜んでいくらでもご案内させていただく。

同じような意味で、5ページの「○推進すべき手法」についても、今申しあげた視点が欠けている。一つひとつ大事なことが書かれていて私も理解できるが、子どもの自発性を促す学校環境づくりを模索すること、これがやはり避けて通れない「推進すべき方向」ではないのか。

最後に、7ページ「(3) 環境保全活動、環境保全の意欲の増進及び環境教育並びに協働取組の推進に関する施策の基本的な方針」について。ここには、行政の施策についての基本方針が書かれており、その二つ目に、今私が申しあげた「自発的な意志の尊重」が記載されている。これを行政の立場と責任において尊重していただけることは、本当に大事であると思う。ただ、この文章の主語が「県民、民間団体、事業者等は」となっており、ここに「学校」が入っていない。学校教

	<p>育での推進を大事にすると言いながら、どうしてここに学校が入っていないのか。「学校」は別なのか。私は、私立学校の立場として、ぜひ申し上げたい。公立学校のお立場はよく分からないが、私立学校は、まさにそれぞれの建学の理念に立って、それぞれ理想とする人間像を描き、それに向かった環境づくりと様々な工夫を、独自の教育として実践している。そういった教育の独自性を尊重するとするならば、私は、少なくとも「私立学校」は入れていただきたいと考える。</p>
今村会長	<p>学校教育について触れていただいたので、まず、現場の視点で先生方から御意見をいただきたい。</p>
大泉委員	<p>私の学校（天童市立長岡小学校）で、今、研究しているのは「学級会」である。</p> <p>重要視しているのは、人との関わり、人の痛みを感じること、自分らしさを出すことである。集会の企画などは正解などないわけで、とにかく発意発想、つまり思いつきのレベルからまず出して尊重できるような学級風土、人との関わりを育てようとしている。</p> <p>安積委員の意見にもあったが、自発性というのは間違いなく子どもの世界を活性化させるし、本当に生き生きとした姿にさせてくれる。自分のことをしっかり見つめて、自分らしさを思いっきり晒すことが出来る環境の中で育てば、実際、学力も伸びていく。ただ教科を教えるだけではなく、考えたり参加したり、表現することを大切にし、なおかつ子どもがその学習活動において主体的になるようにするというような、私達教師のスタンスから育てる必要があるのではないかと。</p>
板垣委員	<p>先ほど、安積委員からあった自発性の問題について、資料を読ませていただいたときに、今回の行動計画を策定するという事業そのものにも感じている。通常、私達が何かやろうという時には、ある課題があって、その課題を解決するべく、いろいろ模索しながら、PDCAサイクルを回していくが、今回は法律が改正になったので計画を作りますよ、という流れである。学校で本当に身近にどういう課題を抱えているのか、ということをしっかり踏まえないと、結局、上から降ってくるもののようなイメージで捉えられて、何も実際に取組みにならない。それぞれの学校で、こういう課題があって、うちの学校だと、どういうことをすればいいか考える、そういう自発性、きっかけを作っていくことが重要である。そのような動機付けをするには、外発的な働きかけと、内面から働きかける内発的な訴えかけがあると思うが、一番大事なのは内発的な動機付けをいかに仕組んでいくかではないか。</p> <p>また、資料2についてだが、文章が長いと感じた。もう少し簡素な表現で短い文章にしてわかりやすくした方がよい。</p>

今村会長	教育委員会の立場から松田委員から御意見いただきたい。
松田委員	<p>感想的なことになってしまうが、この行動計画に載っている「環境」とは何なのか。安積委員がおっしゃったのは、私が思うには、我々の県で言う教育振興計画そのもの、教育そのものみたいな感じである。この行動計画は、「環境保全」とか「山形の郷土を活かす」、そのためにはどう行動すべきか、ということを書くのではないのか。他の委員の意見を聞いていて、少し混乱している。</p>
環境企画課長	<p>環境そのものを保全していくだけではなく、それを通して、山形を創っていく子どもをどのようにして育てていくのかという人づくりが大きなテーマになるのではないのかと考えている。ただ、具体的な施策レベルになると、そこまで切り込めてはいない。もう少し後段の方になるが整理していく必要があるとは思っている。</p>
白壁委員	<p>今の「環境」の考え方に関連して、環境とは、自然そのものだけでは成り立たないし、私達がそこに住む、そこに居るということも環境に含まれると考える必要があり、環境教育も、人と人とのつながりだったり、人をつくっていくというような大きなものなのかなと思う。</p> <p>それで先ほどから、学校の先生方のお話をうかがって、本当にそうだなと思ったのは、私達は山を案内するときに、森林という一つの素材を使って、自然のことを伝えている。自然というものは、「すごいね」、「こわいね」と、子ども達に伝えていくと、子ども達にとって大なり小なり色々な場面があり、時間かかるが、「この自然を壊しちゃいけない」、「守んなくちゃいけない」という気付きが出てくる。そういったことを私達は期待して森林環境教育に取り組んでいる。</p> <p>今回の行動計画も、自然とか森林という言葉がたくさん出ているとは思いますが、山形の自然の中でも森林の働きが大事だということを、もう少し入れていってもいいのではないかと。</p>
今村会長	<p>よく環境「学習」というと学ぶ主体からの見方、環境「教育」というと教える側からのトップダウン的な見方と区別することがあるが、ここでの環境教育は、両方の意味合いで捉えていきたい。</p> <p>白壁委員と同じくNPOの視点で二藤部委員はいかがか。</p>
二藤部委員	<p>私達は、普段、子ども達だけでなく、地域の方、幅広い世代の方を対象に、講座や研修会など様々な切り口で環境教育を実施しているが、やはり一緒に活動している方からも、地域の方に対してどう広げていくか、子ども達にどう伝えていくかという手法だったり切り口だったりですがすごく大事だという話が出ている。</p>

今村委員	<p>社会教育の立場から岩沢委員はいかがか。</p>
岩沢委員	<p>感想的になってしまうが、理想的な人間像として、山形への愛情を持った人というのを挙げるのはすごく共感できる。私も、やはり自分の住んでいるところ、地域的にも県という単位であっても、そこに自信を持って生きていけるような人がたくさんいれば環境も良くなっていくという考えを持っている。ただ、5年でこれを実現するという意味ではないと思うが、私自身そういう短期間の中で自分がこういう人になれるかという、ものすごく不安がある。どういう人が子ども達に対して指導を継続していけるのかなと疑問がある。これがきっと次の具体的な施策のところ、指導者の育成とか子ども達への働きかけとか、青少年の社会活動の中にとりょうに、盛り込まれていると思うが、行動計画が5年間の計画であるとすると、すごく大きな目標であると感じた。</p>
今村会長	<p>環境科学研究センターの環境学習活動のほか県の環境全般も含めて色々な情報を踏まえて基本方針に対して御意見いただきたい。</p>
阿部委員	<p>前回お話申し上げたが、環境科学研究センターは、環境教育実行部隊的なところで、毎日実践ばかりしている。いわゆる環境問題の多くが、実際の生活には直接影響がない。しかし、地球という限られた空間の中に、人間の他にいろんな生物が生存しており、それが生態系としてお互いに関係し合いながら生きているわけだが、人間はその生態系を無視するほど大きな力、影響を及ぼしている。それを制御するのは人間だけというのをわかっていただくのが主な仕事であると考えている。</p> <p>ただ、環境教育と名が付くと、環境の重要さを教えながら、子ども達を育てていただくという姿勢が大切だなと感じた。人と自然だけでなく、人と人、人と社会という点を、自然を保護するという大きな柱の中に、やはり人づくり、山形を愛する、自然を愛するというようなところを強く打ち出していくのがいいのかなという気がする。</p>
大澤委員	<p>私も、山形への愛情が必要ということは、非常に強く思っていたので、岩沢委員に共感いただいたのはありがたい。</p> <p>安積委員からは、「環境そのものを教材として活かす教育」という御意見があったが、まさに同感で、環境に強い好奇心を持つ、環境がどうなればどうなるといった、想像力そういうものが非常に大事だと考えている。また、「自発性」についても、私も前半にもっと盛り込むことができるのではないかと思う。7ページの「○自発的な意思の尊重」について、学校が含まれていないという御意見もあったが、「県</p>

<p>今村会長</p>	<p>民、民間団体、事業者等」の「等」に含まれているのだと思う。事務局の方で記載についてよく考えてもらいたい。</p> <p>大泉委員のお話にも同感で、いろんなことに好奇心を持ちながら、創造力をめぐらせて因果応報というか、環境について何をどうすればこうなるんだという、頭が回る様なそんな人が必要だなと、感じた。</p> <p>板垣委員からは、文章が長すぎて、わからないという御意見があった。私も短い文章が大好きなので、これは事務局に強く申ししていきたい。</p> <p>白壁委員からの気付きの話は、まったくそれも同感である。ただ、この部分に森林が特に大事ということ盛り込んでいくというのは、川、海などいろいろあるので議論が必要かと思う。</p> <p>私も資料を見せていただいて、これまでより一歩進んで、やっていこうということは感じている。また、前回は御意見があったが、「環境教育は人づくり」という方向性を踏んでいただいている。やはり環境を通してどういう人間をつくるかということがだと思ふ。</p> <p>また、学校教育も、戦後、教育基本法ができてから、「教育は人格の完成を目指す」と書いてあり、大元まで原点に立ち返れば、それこそ人間教育ということになる。近年、学校で国際学力テスト等が頻繁に実施されているが、その背景でも、人間関係構築力、人間形成、自立性などを目指している。学力テストも、原点回帰されているのだろうと思う。そういう意味でも「人づくり」という方向性でよいのではないか。</p> <p>また、学校教育の中で「新しく学ぶ、自ら学ぶ、自ら考え、判断、行動する機会を与える」というのは、諸外国では、実施すべきプログラムの中に明記されているが、日本では、あまり明記されてこなかった。それが文部科学省も最近、提唱するようになっており、やはりそういう機会を与えるというのは、環境を整えるということなので、安積委員がおっしゃった方向性と合致するんだと私も考えている。</p> <p>学校に関しては、ここは一般的な部分が書かれており、おそらくこれを推進施策において、より具体的に記載し、さらに教育庁で作成する学校教育での指針へ書き込まれていくということを期待したい。</p> <p>自発性については、教育系の人間からすると、主体的・主体性という言葉が好まれる。自発的または自主性、主体的・主体性、その二つの言葉を盛り込んでいただくと嬉しい。この文章の中で主体と書いてあるが、主体とは本人ということなので、学校関係者には、自発性または主体性と書いてあると分かりやすかったと思う。</p> <p>最後に、文章に関しては、体裁に関しては県の考え方もあると思うので、検討いただきたい。</p>
<p>安積委員</p>	<p>自発性に関して、追加で申しあげたい。教育の手法（業(わざ)）に</p>

は、本質的に違うものが二つある。一つは「結果を強制していく」業。もう一つは「深い原因を与えていく」業である。どちらも必要な業ではあるが、今、本来は経済活動において有効に働く「成果主義」が教育の領域にまではびこってしまっていて、教育の現場は今、子ども達にもものすごく結果を強制してしまう傾向が強い。「教育は百年の計」と言われるように、教育本来の仕事は、その子の10年、20年、30年先に花開くような「深い原因」を、自我形成の土台が一番作られる子供の時に与えていくことにあると思う。この営々とした教育の営みこそが、最終的にその子にしかない貴い資質を開花させ、それが一番、地域や社会や世界のためになっていくのだと思う。この視点に立って、どのような深い原因を与えていくかを考えていくこと。その重要性を、今私はすごく感じている。教師は、どうしてもすぐに教えたくなるし目に見える結果を出したくなるものだが、自戒を込めて思うことは、このような新たな環境教育を私たち山形県の教育風土に深く深く根付かせていくためには、本当に「長期的視野と姿勢」で取り組むことが必要ではなからうか。

このことを現場教師として言い換えるならば、教師が一番教えたいと願うことほど、実は「教えることができない」という本質を持っているかも知れないということだ。科学的真理は教えられる。子どもが分かっているところから必要な情報を与えて、分かりやすい言葉で論理的に説明していけば、今日の最先端の科学的知見にまで子どもを導くことは可能である。しかし、「人づくり」に関わる真理、つまり「生きること」に関わる真理は、言葉では教えられない。例えば、「山形を愛する」という時の、「愛する」とはどういうことか、言葉で説明しても、子どもは分からない。子どもは、自分がそれを自ら生きてみて、経験してみて、初めてその大切さが分かる。真に愛されて、初めて、「真の愛」を知る。自然を愛し、人を愛し、山形を愛する子どもを育てたいのならば、本当の愛とは何か、子ども自身が自ら愛される者として経験しないと分からないのではないか。それなのに我々教師や大人の側がどうしても「教え込もう」としてしまうから、子ども達がいびつになってしまう。

教育の現場はこういう現実直面し苦闘しながら「人づくり」の教育（人間教育）を模索しているということ、だからこそ各学校現場の教員と子ども達の自主性・主体性を大事にしていきたいということを、特に行政の立場におられる皆さんにご理解いただければ有り難い。

今村会長

他の委員も自分自身の現実を振り返ってみると共感されると思う。事務局では、これらを盛り込んで、また、言葉を書く以上、それが意味する言葉をきちんと配置してまとめていただきたい。

② 山形県環境教育等行動計画（仮称）における環境教育の推進施策の骨子（案）について

事務局から資料 1、3 により説明がなされた後、各委員が意見交換した。意見交換の内容は以下のとおり。

<各委員の意見>

今村会長	<p>こちらの資料は、今回新たに一番右の欄に、具体的な推進施策が記載されているが、特に追加で取り組んで行くべきことなど御意見をいただきたい。</p>
白壁委員	<p>最初に、2 ページの二つ目の●の学校林の記載について申し上げたい。学校林の学習については、その地域の学校の山を知っている方との協力体制が必要になるので、今後の取組みに「地域との協力体制」と入れていただきたい。また、ここで学校林と太陽光発電施設が一緒になっているのは、学校がすでに持っている施設という意味なのだろうが、違和感がある。別にしてもよいのではないか。</p> <p>次に質問になるが、5 ページの県の各部局課の取組みの記載について、現行の山形県環境教育推進方針の項目の番号と対応していないのはどういうことか。</p> <p>最後に7 ページの人材の育成について申し上げたい。三つ目の●に県内の4 つの「県民の森」の森の案内人の養成については、県では実施しておらず、今年やっと、やまがた緑環境税で最上総合支庁の事業として遊学の森と一緒に実施された。つまり森林環境教育については、人材育成の方がまだまだできていない。前回と重複するが、現在取り組んでくださっている方は高齢化しているし、若い方たちは、なかなか入ってこれない、興味がない。新たに加わってくれるのは、「環境のことも最近ちょっと興味を持ってきた」というような 60 歳以上の方が大半で、若い方々を取り込む方法をもっと考える必要がある。</p>
安積委員	<p>3 ページに「学校の教職員の資質の向上」とあり、国の基本方針でも今回の中心テーマの一つになっているが、ここでいう「資質」とは具体的にどういう意味なのか。</p>
松田委員	<p>私もこの部分については、同じように気になっていた。施策内容を見てみると、知識や研修体制の充実になっており、標題自体が内容と合っていないのではないか。</p> <p>また、内容について3 点ほど申し上げたい。一つ目の●に、県教育センターの研修とあるが、具体的に県教育センターだけ書くのはいか</p>

環境企画 課長	<p>がなものか。また、二つ目の●に、学校訪問とあるが、学校は何百校とあるので、そんなに訪問できないと思う。「積極的に学校現場に訪問して」としてはどうか。最後に、三つ目の●の「取組みの成果発表」について、児童、生徒にとって、日ごろの環境への取組みを発表する機会は、あまりなく、印象に残る機会だと思う。ここには、高校生だけ書いてあるが、小学校、中学校も含めた方がよい。ただ、この項目ではないのではないか。</p> <p>「資質」については、実は具体的にこれというものはない。逆に「資質」として大切にすべきことについて御意見をいただいて膨らませたい。</p>
岩沢委員	<p>また、白壁委員の、5ページの現行の山形県教育推進方針の施策と右側の新しい推進施策が対応していないという御質問については、ここは、今回新たに組み立て直しているため、直接的に番号は対応していない。</p> <p>1ページの二つ目の●に、社会教育の事業との連携に書かれてあるところについて、私もこの事業のコーディネーターをしているが、そのその連携というのが、ただの「仲介」という意味なのか、それともコーディネーターを巻き込んで、その環境づくりをするのか。学校に対しての仲介だけであれば、とても無意味だと思う。</p> <p>また、4ページの一つ目の●に、「町内会、子ども育成会、放課後子ども教室において環境学習を取り入れてもらえるよう」とある。これらは、社会教育の主な事業で、私もコーディネーターをしている立場から、これに環境教育学習を取り入れていくというのはいい考えだと思うが、そもそも呼びかけても、子ども育成会とか町内会への親子での参加は、ものすごく少なくて苦労している。そういう実態を理解したうえで、こういう機会の充実を図るといふのでなければ、実現性に疑問がある。</p>
環境企画 課長	<p>まず、コーディネーターとの連携については、県で認定している環境学習支援団体など環境学習のプログラムを持っている団体をどうにかして学校現場にマッチングさせたいというのが元々の記載の意図である。</p> <p>次に、育成会などに親子で参加される方が少なくなっているという話はよく聞いている。私は以前、朝日町で勤務させていただいたことがあるが、一部地元の育成会のOBの方を中心にして、子ども達と一緒に活動している団体もあった。そういう取組みを広げていく必要があると考えている。</p>
白壁委員	<p>12ページの拠点機能整備についてだが、「県の取組み状況と課題」</p>

	<p>欄には、県森林研究研修センターの記載があるのに、新しい推進施策では記載がなくなっている。森林環境教育の学習プログラムの開発や、先生方に対する研修会の開催などを行っており、森林研究研修センターもそういう、森林環境学習の拠点として加えてもいいのではないかと。</p>
<p>環境企画 課長</p>	<p>この部分では、幅広い環境分野について、情報を発信していける拠点を一つの核として作り、そのうえで、それ以外の様々な分野の環境学習拠点とのネットワークも図っていくということを検討している。</p>
<p>松田委員</p>	<p>「学習プログラム」という言葉が様々なところででてくるが、イメージがわからない。教師が授業等で使うためのプログラムであるとするれば、普及するのが難しいのではないかと思う。</p>
<p>環境企画 課長</p>	<p>先ほど申し上げた県の環境学習支援団体など民間団体が提供している様々な学習プログラムを想定している。それらの情報を集約するとともに、教育委員会と連携して、学校現場で必要とされているものを提供できればと考えている。特に県内では、再生可能エネルギーについての学習プログラムがないと言われており、今回の一つの目玉になっていくのが、それらの新しい学習プログラムの作成である。</p>
<p>今村会長</p>	<p>学習プログラムの提供やネットワークづくりに関しては、実現性があると思うが、開発となるとかなり大変ではないか。開発の前に指針がきちんとあって、かなり細かい目標、ゴールまでを挙げたうえで、プログラム作成に取り掛かれるのだと思う。文部科学省でも環境教育指導資料は作っているが、あくまでもこれは例として提示している。県で、学校で使ってもらいたい学習のためのプログラム「例」を作るとか、プログラムのための指針のようなものを作るとか、そういうことであれば可能かとも思うが。</p>
<p>環境企画 課長</p>	<p>新しい学習プログラム作成について、「開発」という意味合いが、少々強く出てしまったが、NPO等、学習プログラムを提供する人たちを育てていく点も重要と考えている。</p>
<p>今村会長</p>	<p>学習プログラムの部分は、「開発」という言葉が誤解されるようなので、表現を整理していただきたい。環境科学研究センターの荷がかなり重いように取れる。</p>
<p>大澤委員</p>	<p>「学習プログラム」という言葉自体の認識が違うので整理していただきたい。</p>

安積委員	<p>今の学習プログラムの問題と先ほどの教職員の資質の問題は、非常に絡んでいると思う。新しい学習プログラムや教材は、現場の教員自身が作成しないと、実際にはほとんど使えない。今村会長の「モデルを示すまで」という御意見に同感である。そこでこそ教員の自発性が求められる訳で、自分の学校や地域が持つ固有で多様な環境要件の中から新しい教材や学習プログラムを発見できるような、新鮮な眼力と感性こそ、自分の学校から新しい環境教育を創り出そうとする教員に求められる資質だろうと思う。学校からそういう意欲が生まれた時にはすぐに必要な支援や情報提供を行政からもらえると分かるような状況づくりが大事だろう。いずれにせよ、やはり現場が自発的にやってみたいと思うことが肝要で、そのような刺激や啓発をどうなしうるかが重要になるのだろうと思う。</p>
今村会長	<p>これは大泉委員の方が専門だと思うが、最初こんな問いかけがあって、教材を持ってきて、こういうこれだけの時間を確保してという指導計画があると現場の教員にも使っていただけたらと思うが、そうでないと非常に難しい。資質と言えるかはわからないが、そういう指導計画をつくる体験の機会を現場の先生達に提供する研修は、県教育センターで実施しているが、それだけでは不足しているというのは間違いない。私も、その研修の指導のお手伝いをしているが、現場の先生方もお忙しくて環境という、教科でないものの指導には、なかなか取り組めないという声をよく聞く。取組みについて情報交換する教員同士の交流会のようなものを開催いただくのもよいのではないか。</p>
大泉委員	<p>確かに、環境教育が一番、ということにはなっていないが、自然体験活動や環境保全に関わることを義務教育の段階で学習しなくてはいけないという点は重く受け止めている。今村会長から、教科でない、つまり総合的な学習の中で3年生以上の学級活動として実施している小学校が多いと思うが、教科の中でも調べてみると、環境教育に関わっている内容がある。家庭科だつてごみの処理とか、体育だつて健康と環境と関係があるし、理科でも身近な自然の観察など、教科の中でも十分まだまだそういう環境教育とリンクさせて深める内容もあると思う。総合的な学習をはじめとした子ども達の環境活動など各学校の様々な取組みはまだまだ進める必要があるとは思いますが、合わせてそれぞれの教科の教育計画の中で横断的に関連付ける力がもっと必要なのではないか。</p>
今村会長	<p>大泉委員もおっしゃったが、広い意味での環境教育に取り組んでいない先生はいないけれど、狭い意味での環境教育と言われると、はっきりとうち出せる人は少ないのが現状である。ちょっとでもそれに関</p>

わっていくことを実践する先生を認めたり、励ましたり、というのが大切なんだと思う。

教員も子どもも生活する市民の立場からすると責任と権利は同等である。従って子どもが自発的であると同時に、教員も自発的、主体的になることが必要である。環境に関しては、子どもの方がむしろ、主体的である場合もある。あくまでも教員は「教える」という立場ではなくて、「一緒に歩む」という立場である。だから最近、ファシリテーター (Facilitator) という言葉が使われるようになってきている。一緒に歩みながら学んでいくという姿を学校教員に求める、それが教員の資質とも言えるのではないか。

板垣委員

私の学校は工業高校なので、環境という意識は最初から頭に入っていて、普段、計画などは全然意識していないと前回申し上げたが、学習指導要領ではどうなっているのかと見てみたところ、小・中・高に共通して学習指導要領に挙げられているのは、総合的な学習の時間の学習例としてである。小学校では、理科と生活の目標に、それから中学校では理科、高校では理科に自然として少し記載がある。工業だけ、教科の目標としては、「環境及びエネルギーに配慮しつつ」という記載がある。この工業の記載は、高度成長時代に経済優先で、工業を進めた結果、環境破壊の問題が生じたため、環境に配慮する必要性を学ぶ必要があるという意味合いなのかと思う。科目では、工業の科目で環境工学、地球環境科学というものがあり、農業では、農業と環境、海洋環境という科目がある。これはいずれも専門的な科目で、学校によって学習できるところとそうでないところがある。

1 ページで、「県の取り組み状況と課題」の欄で、調査結果として、環境教育について地域に連携・支援してくれる団体や企業、住民がいる割合が、中・高等学校が 35% だったというデータが記載されている。これは、県内高校の数では普通高校が 6 割、専門高校が 3 割、その他が 1 割となっており、そのまま専門高校の割合なのではないか。工業、農業、水産といった専門高校では、学習指導要領でも環境について取り組むのが当たり前であるが、特に進学を重視するような高校で取り組むのは難しいのではないか。

最後に、4 ページの二つ目の●について、「廃品回収」という言葉があるが、うちの町内会でもやっているが、廃品回収は今、行われていないのではないか。「資源回収」ではないのか。

今村会長

学習指導要領の記載についても御説明いただいたが、この行動計画の施策の部分では基本的な方法を示し、今後予定している山形県環境教育指針の改訂の中で細かい部分については反映していただくこととしたい。

環境企画課長	板垣委員からお話あった「廃品回収」については、最近、「資源回収」という言葉が一般的なので修正したい。
今村会長	板垣委員の御意見と関連して、私どもで調査した結果だと、公立中学校では、総合的な学習の時間は、「役に立たない教科科目」のワースト3に入っている。それだけ非常に形骸化しているとか、本来の姿でないものになっていると思われる。次の山形県環境教育指針の中でも触れていただきたい。
板垣委員	先ほど、普通高校で環境教育に取り組むのはなかなか難しいと申し上げたが、どうしたらできるかと考えてみると、1ページの三つ目の●に関連して、具体的には学校行事や生徒会活動、部活動での取組みがあるのではないか。
阿部委員	<p>環境教育を実践しているセンターとして申し上げたい。センターで学校に出前講座する機会があるが、担当からは、限られた先生だけが一生懸命という印象だと聞いている。その内情は今日お聞きしたような背景があるのかと理解した。先ほど板垣委員から進学校では難しいという御意見があったが、我々のセンターにも基本的にオファーがない。社会人も同じ状況で、そのような意識のない方をどうやってその場に引っ張ってくるかが重要ではないか。指導者を養成するのも確かに必要だが、皆さんにわかってもらうには、現場に来てもらって現状を感じてもらわなければ先に進まない。具体的な施策は思いつかないがこれは重要だと思う。</p> <p>また、環境学習をしようとした時に、どこに聞いたらいいかわからないという声も聞く。環境科学研究センターを拠点にする検討を行うとのことだったので、行政の中だけでも情報窓口の一本化ができれば、もう少し効率的になると思う。</p> <p>最後に、環境科学研究センターは、環境に関する図書の蔵書はかなり充実しているが、なかなか村山市まで来て見ていってもらうのは現実的に難しい。今の県立図書館は、他の図書館とのネットワーク化を進め、蔵書をインターネットで検索することができて発送までしていると聞くので、当センターも加われればと考えている。</p>
今村委員	<p>今の御意見はネットワーク全体をどう作っていくのかというところにも関わっていくかと思う。</p> <p>また、基本的な考えとしては、来年とか5年以内とかというスパンではなく、将来について今の時点で考える方向性と捉えて、一歩でも二歩でも長い先を見通して頑張りましょうよ、という行動計画としたい。「全部しなければならぬ」という誤解をされることがあるが、どこからでもいいから得意な面から一つということ埋めていくという</p>

	ことで私は解釈させていただいている。
--	--------------------

(4) その他

環境企画課長から、次回の協議会は1月開催予定、2月にパブリックコメントを実施、3月に計画策定予定である旨、説明があった。また、次回の協議会まで追加で意見があれば事務局へお寄せいただきたい旨、説明があった。

(5) 閉会